

立命館大学日本文学会創立の頃

芦谷信和

一九五二年三回生として編入学した。日本文学会の創立は四回生卒業年次である。私は最良の時期に恵まれた。この年清水泰・後藤丹治両先生の還暦を祝賀し、記念して、立命館大学日本文学会が創立され、『論究日本文学』が創刊されたのである。

創立準備委員会が作られ、誌名についてもいろいろの議論があり、最適の誌名に落ち着いた。「論究」を上に掲げたところが斬新であった。その設立の動きには、その後学界に活躍された先輩卒業生が中心となり、設立資金を寄付され、大学院生や学部学生からも加わり、一丸となって、準備された。当時は専任教員としては立命館大学の出身者は和田繁二郎先生が助教授としていらっしやっただけで、大学教員としてはごく少数の非常勤講師をされている先輩が居られた程度であった。清水泰、後藤丹治、宮嶋弘の三教授を顧問に戴き、先輩卒業生の方たちが和田先生を委員長として押し立て、創立に努力されたのである。

これらの先輩諸先生として、岡本彦一、小島幸三郎、大橋清秀、土岐武治、鈴木弘道、水田潤、浅野達三、田中松太郎などの方々

を記憶している。

創立準備委員会では会則案が準備され、設立総会が開催された。在学生は全員が会員となって、会費を納入した。（この制度は大学紛争で廃止された。）

翌年私と学部卒業年度を同じくした森本修氏が助手に就任されて、総務として非常に有能な手腕で、その後の学会の運営事務を担われた功績は大きい。

組織には総務の他、編集委員、企画委員、運営委員が置かれた。創立の一年後には評議員制が敷かれ、後藤先生が転任されて、会長に清水先生、副会長に宮嶋先生が就かれた。私も評議員の一員となり、企画と運営を統一した事業委員に名を連ねた。

まもなく国崎望久太郎先生が復帰され、和田先生が教授になられて、日本文学会も充実発展を遂げていくこととなる。

しかしながらこのような整った組織が一朝一夕にして成ったものではなく、長い間の先輩諸氏の営々たる努力があったなればこそである。私が編入学した頃、大学院および学部にはそれぞれ学

生を中心とした研究会があり、世話役・委員などがいて、先生方の御出席や御指導を仰いで、随分自主的に臨地研究会などを催していた。そうした機運が敗戦後の社会の立ち直りの気運と共に、日本文学会の結成に結実していったのであろう。学会の設立とともに年一回の太会での講演と研究発表・会員総会を中心として、種々の事業が整備されていった。万葉旅行も復活した。学生の自主的な研究会は後に学会の学生会会になっていった。また夏期休暇中の夏期講座（これは後に一定の役割を終えたとして解消された）、国語教育ゼミナール、毎月開かれた日本文学談話会、文学旅行などの年中行事が学部、大学院の講義授業と結びついた形で発展していったのである。

日本文学会の創立には当時の専任の先生方の御熱心な御指導があったのであるが、同時に卒業生、在学生の学問研究への情熱と立命館に伝統的な自主性が大きな役割を果たしたのである。そうして教員、在学生、卒業生を一体とした学会と、専攻教学の充実と向上との、相互作用は、その後の専攻の拡充発展に計り知れない大きな寄与を成したのである。

（あしや・のぶかず 本会名誉会員）